

廻向の御名

私は今生きている

「私は今生きている」「じつと目をつぶって深く冥想する。心の底から何かしら力強く叫ぶ。」

「私は今生きている」

それだけ、やっとなつぷやいた時、私の全霊は感激にうちふるい、沈みきつた心の底には無限の涙が湧き出る。

「私は今生きている」

それは断じて、浮いた心持ちでもない。安価に感謝した心地でもない。無限の寂しさの中に雄々しくもこみあげて来る血の叫び声である。

「私は今生きている」

このたつた一つの事を忘れているならば、道德だ、哲学だ、宗教だ、芸術だと言つたところで、職業、貧富、貴賤、夫婦、兄弟、親子、家庭、社会、国家、世界、そんなことを言つて騒いだところで、それは何にもならぬ概念の遊戯であり、乾からびた砂原のような死の世界、幽霊の世界の幻にすぎぬのだ。

「私は今生きている」

おい同胞！ 私の愛する兄弟たち、もう一度眼をつぶって考えて見ようではないか。一念ここに思い至る時、万物は皆生きていてはいないか。私が生きていないでどこに「苦」があろう。苦がなくてどうして楽があろう。宗教もない。道德もない。芸術もない。

「私は今生きている」

この涙ぐましい感激のまつ唯中にこそ、全ての人生が生れ出づる無量の声が聞えるではないか。

教育

人は全て金持ちになれば幸福を感謝し、食にも因るほど貧しければ、その不幸を呪うものである。幸福に出会って感謝し、不幸に遭遇しては悲しむ人の子には、そこに種々なる教育がある。

感謝せよという教えがある。富めば富んで感謝し、貧しければ貧しくて感謝する。病気を感謝し、衣食に感謝し、子に死別れて感謝し、火事にあつて感謝する。生活の一切をあげて感謝せよとの教えである。しかし考えて見ねばならぬ。それが果して行きづまりの出来ない日暮しだろうか。子供が生れて喜んだ者は、子供を失つて泣かねばならぬ。富むことを感謝していたものは、貧しくなれば呪うのが当然である。

一家が全部達者であることに幸福を感じていた者は、病魔におそわれた時は暗い一家になるのも当然である。一度や二度は、不幸に出会つても、神の試練、仏の御はからい、御催促だと感謝もしよう。けれどもそれが末通つた道であろうか。私の生活相そのものを感謝の種に見て行こうとする教えは、ついには私を躓かせるのである。幸福であることを感謝せよとも言わぬ。そんな常識的な世界を去つて、もつと深い世

界をのぞいて見よう。私どもは、唯ぼんやりと感謝の霧の中に自分を偽つてもならぬ。真実の価値を見失つて、永遠のさまよいに沈んでもならぬ。

「私は今生きている」

このたった一つの事実を出発点にして、深刻な反省と考察を加へつつ、静かに、如来の生命にふれさせてもらおう。

宿業力

見てごらんなさい。人間の住むところそこには、冷たき監獄と裁判所と、厳しい警察が設けられて、国費がここに費され、国民の血潮はここに消費されています。人々は如何にしたら、この呪わしい監獄と裁判所と警察とをなくすることが出来るかと研究し、努力しています。しかし人類の歴史があつて以来、大正の今日まで、厳しくこそなれ、そうしたものが地上からなくなった時があつたでしょうか。人々はこれについて考えて見ないのでしようか。

一体それはどこにその根本原因があるのでしょうか。自分を見つめて生きる私どもはおそろしいことを見出してしまったのです。私の心の中を見つめます。見よ。私の心の中にこそ、あらゆるおそろしいものを持つているではありませんか。殺人、放火、強盗、窃盗、強姦、詐欺、あらゆる犯罪の根本は皆私のうちにあるのでありました。

「虚偽を言つてはならぬ。」それは如何に古臭いと言つても、守らねばならぬ道であります。しかるに、私のうちには平気で虚偽を言う心があります。そもそも、この世界がかくまで虚偽の世界になつた原因をば他に見出すことは出来ないものであります。私のこの虚言一つ平気でいい得る心、その心こそ、かくまで人類が「そらごとたわごと」であることの根本原因であります。

人々は、新聞の三面記事の毎日なくならないのを見て、眉をひそめて、さも嫌らしそうに「仕方のない奴どもがいるから国家が汚れるのだ。」とさも聖者にでもなつたらしく申します。青木月斗氏の奥さんが、沢山な子供の母であり、責任ある家庭の主婦であり、俳壇の権威月斗先生の夫人であることをも顧みず、一書生と北海道に走つたのを見た時、世人は、皆高い世界から下界をでも見下すように、貞操論を持ち出したが、世道人心の腐敗したことを慨歎していました。「妻たる者が……」「母たるものが」とあらゆる批判の声をそれにむけるのであります。もちろん私とても、決してあんな事件をよるこぶ者ではないのであります。一倍まさつてそうした事件が後から後から出て来ることに悲しむ者であります。

しかるに一度私が私にたちかえる時、それは決して人様を笑つたり怒つたりしてはいられぬのであります。私には一生そうしたことがないと誓われましようか。いえ、私が他人の妻を恋せぬと言われましようか。私のこの心のうちに、女性を見て、色情を感じるこの心がなくならない間、刑法第百八十三条「有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ処ス其相姦シタル者亦同ジ。」この条文は存在するのであります。この嫌な法律を存在させている者は、誰でもない。私の今現に有するこの、処女だとか妻だとかの差別を超えて動き出るこの心こそ、たった一つあの法律を生み出した根本

的原因であります。しかして私はついにこの心を消滅せしめることが出来るでありましょうか。もし私の心がなくならなければ、永劫に地上から、姦淫の二文字がなくなる時はないのであります。千載悲泣しても足りませぬ。

叛逆者

都会の子供たちはまず幼稚園に学びます。十九世紀の教育学者フレーベルがドイツにおいて幼稚園を開いたのが初めてであります。人間はまず満四歳になるやこのフレーベルのはじめた幼稚園に入つて、そのいわゆる恩物によつて教育がほどこされてあります。ついで小学校に入ります。ここでは、六ヶ年教育を受けます。朝も昼も、道徳を教えられ、知識が授けられ、体育をほどこされます。過去明治時代には、日本教育はその原理をヘルパルトの教育学説によつて与えられました。有名なるヘルバルトの五道念、内心自由、完全、好意、正義、衡平、その五道念に裏付けられたる主知説によつて、興味中心の教育は、日本明治時代の教育でありました。

大正の今日、新理想主義のあらゆる哲学説、教育学説、倫理学説が紹介せられて、世は走馬燈のように多忙に、論ぜられ、実行せられ、研究されて小学教育から大学教育まで、秩序整然たる教育が行われています。人々は金の力によつて、学士となり、博士となり、堂々たる大家となつて、カントの哲学を論じ、東洋文明を論ずるのであります。

しかし私は悲しいことながら、かかる有様を見て、この教育法を見て、お暇をせねばならぬのであります。現代の教育は要するに、国家社会の椅子に腰をかける人を作る教育であり、社会の機械を作る教育だからであります。機械や椅子は決して生きた人間ではないのであります。

十八世紀にドイツが生んだカントは不朽の大哲学者であります。カントを捨てては今日の全ての哲学もその立場を失ふのであります。まことにカントの思想信念は、カントの考えたことが正しい間、カントの示した教育説は我等の前にほんとの世界を表してくれた。理想せられたる美しい世界は我等の前に開けている。彼は偉大なる哲学を揚げ、厳しい道徳律の織鞭をふるい、永遠の世界を前途に見せて、それに至る唯一の方法を教育だと言つた。

まことに教育によつてのみ、時代が進むにつれて、何時かは完成に近い人類社会が現われ、幸福なる地上を出現することがその信念であり、哲学の帰結であつた。噫。されど、私は思はず長歎息せざるを得ない。教育はそれほど大きな使命を担うことが出来るか。私はもう一度私にかえつて静かに思わねばならぬ。一念私は私の内心にたちかえる時、まことに広島高師の福島政雄先生と共に、この冷たき哲人の世界からお暇せねばならぬのであります。

「その深き立場から、人生を觀じ倫理を説き、ついに教育に及んで人類の将来を望んで光ある世界を描いているその姿は、まぎまぎと吾人の眼の前に見えるように感ずるのである。吾人はそこに秀麗なる富嶽を仰ぐようにも感ずるのである。しかしながら吾人はその秀麗なる姿を仰ぐと共に、哲人に対する吾人の淋しみを感ぜざるを得ないのである。哲人の背は卓爾として吾人の眼前に聳えている、吾人の前には格率の

急坂があり、吾人の背には無上命法の鉄鞭が鳴り響いている。吾人は既にスペンサーに背をむけて去ったものである。而して今この急坂を前に仰いでいるのである。吾人は如何にしてもその急坂をよじ登らねばならぬ。しかもこの時すでに吾人の心の中には力強い反逆者が現われているのである……。」

噫。この私の心中に出没する反逆者、王陽明のいわゆる「心中の賊」善導のいわゆる「群賊悪獣」、この永遠に亡びない反逆者こそ、全ての哲学をも、道徳をも、木葉微塵に粉碎するではないか。あわれ、十数年の教育も数千冊の読書も、あらゆる記憶されたる概念も、一度我が心中にこの一群賊が頭をもたげた時、一切が権威を失って、そこには暗黒の世界が血みどろに残されるではないか。あああの冷たき監獄の鉄壁も、私のこの反逆者故に造られてあるのだ。煩瑣なる法律の条文もこの複雑なる我が心中の賊を縛る捕縄にすぎないのだ。教育もここに権威を失い、哲学もここに唯一片の概念となりおわるのである。

永遠の戦場

ワシントン会議が開かれて、軍備縮小が実行されて、日本や米国や英国の海軍力を制限し、巨万の富をかけた軍艦が打ち沈められ、軍艦建造が自由に出来なくなつて来ました。行く行くは世界から戦争という二文字をなくする考えでありましょう。然れば、果してこの地上から、血なまぐさい戦争がなくなるでしょうか。まことに戦争をなくしたい。数百万の人の命と、数百億との財宝とを使って世界を修羅場にした、あの欧州大戦を終極として、否今日この頃支那に於いて行われつつある動乱を最後4として、地上我等の子孫をして戦争を過去の昔噺の種となさしめたい。それが果して出来るか。出来るか否かを私に問うて見たらいい。私はまたも私にかえらねばならぬ。

思うてここに至る時、私はまたもや千載悲泣の痛ましい凡夫であります。平和を喜び、人々と共に和ぐ世界の欲しい心は人一倍強いと思う私の心の裏には、不思議にも、法爾自然に、争わねばやまぬ心が動いているのであります。人の小さい過失をも責め、妻や妹や親の言葉尻さえ捕えて争わねばやまぬ悪魔を見出すのであります。貸した金を支払わない時、一度や二度は言葉柔かに言つて見るが、ついには法廷に出て白黒を定めた心、私の仕事に対して邪魔をする者をば、力を持って亡ぼしたい心、私のパンを取つて食わんとする者と戦つて、私のみが生きてゆかんとする心、その心こそ、実に世界から戦争をなくすることの出来ぬ原因ではないか。

噫、まことに私にこの心のある間、ここ数日広島の天地に爆音高く飛んでいるあの飛行機も、ついに戦のために使われるであろう。私どもの過去において、多くの聖者、哲学者によつて、平和論は説かれた。そうしてそれが人間の理想でもあった。しかしながら、歴史あつて三千年、人の世の記録はついに戦争の歴史でしかなかった。戦争なくしては人生はないのか。戦いなくしては人生はないのか。戦いなくしては平和もないのか。しかもこの地上から戦いをなくしようとするれば、私のこの心中の賊を亡ぼされる日が来ない以上、ついに永久平和の理想は人類の唯の夢でしかないのだ。

然して私は毎日この悪魔に悩まされ、ついに、これを征服することに絶望したのだ。故に人類も亦ついに、この永久平和の理想を永劫に棄てねばならぬのだ。

まことに、私の心中に現われ出づる戦いの心こそ、満州の野に幾万の同胞を白骨にし、海に恐しい軍艦を列べ、陸に厳しい剣戟の林を立てているのである。

全てが我一人の責任なるが故に、罪悪なるが故に、世界列強の会議でも如何とも出来ぬ。法律や訓令では如何とも出来ぬ。私が私のこの反逆者を退治するより外に一生衆生の救いはあり得ない。

惨憺たる狂態

夜の暗黒が来ると、都会は百鬼横行の巷となる。昼のように明るい電燈の下、亡霊のような化粧の女が、生めかしい姿に、呪われの墮落を眼の下に見せて、公娼、私娼が男子の生血をすすろうとしている。私はそれを見て、絶望の吐息、人類腐敗の涙をしぼらざるを得ない。常識の世界では公娼廃止運動が行われ、私娼退治が警察の手で行われたら、あんな嫌な女たちが救えると考えている。もつと深い反省の世界に於いては、あの痛ましい、あの呪われた世相、それこそは、私の心の作ったものである。私の心を具象せられたに過ぎないのだ。思えば我一人の罪であり責任である。

活動写真が私をよぶ。劇場の音楽が私を誘惑する。人の世にもし寂しさがなければ、どうして活動を見る人があろう。劇場が立っていよう。若い女が人形のように化粧して、馬に跨つて木戸口にさらされているのは曲馬団の一行である。私はそれを注配する気になれぬ。若い女の子が、異様な服装をして音楽と共にほとんど裸体に近い服を出して躍りまわる。人々は歌劇だという。人間は全て狂者なのだ。全てが狂人なのだ。見る者も狂人であれば、踊る者も狂人なのだ。あんなものを見ねば暮されないほど人は狂者なのだ。しかもその恐しい種は何処にあるか。私のうちにこそ、それらの全てを求める心があるではないか。

永劫流転

まことに我を裏切る者、我に叛く者は我であった。しかもその我に叛く群賊をついに如何ともすることが出来ないのだ。ここに我はついに、精神的破産に陥つたのである。永劫救うべからざる我を見たのである。

我が聖親鸞は、この悲痛なる生命破産の我を見出して、血をもつてかの信巻に書きつけたのである。

(一)「一切の群生海、無始よりこのかた、今日今時にいたるまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。」

(二)「然るに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。ここをもつて無上の功德、値遇しがたく、最勝の浄信、獲得しがたし。一切凡小、一切時中に貪愛の心、常に能く善心をけがし、瞋憎の心、常によく法蔵をやく。急作急修して頭燃をはらうがごとくすれども、すべて『雑毒・雑修之善』となづく。また『虚仮諂偽の行』と

なづく。『真実の業』となづけざるなり。この虚仮雑毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。」

(三)「しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の廻向心なし。清浄の廻向心なし。」

こんな困難な文章の読めない人のことを思うて、これをもやすく書き替えて見ます。

(一)「あらゆる衆生は過去久遠の昔から、今日、今時に至るまで、煩惱罪惡に穢れ汚れて、少しも清らかな心をもつておらない。うそいつわり、へつらいのころばかりで、真実の心がない。」

(二)「しかるに無始よりこのかた大海にもたとふべき一切衆生は、無明の暗闇の世界をさまよい流れ、二十五有の迷いの間を、車の輪のめぐるが如くに迷い歩いて、四苦八苦にしばられてやむ時がないから、真実の信樂がない。先天的に必然に真実の信樂がない。だから無上の功德(六字の名親)におあいすることは出来ず、最も勝れたる清らかな信心を獲得ことも出来ないのである。全て凡夫という者は、微かに表われる善心がないでもないが、常にむらがり起る貪欲愛着の煩惱をもつてその善心を汚し、ささやかな功德は積むことはあつても、嗔り憎む煩惱の火でその功德を焼きつくしてしまふのである。だから、頭に火のついたのをはらうが如くあせりあせつて善根を積んでも、修行をしても、すべて毒の雑つた善と言われ、うそ偽りの行といわれて、決して真実の業となづけられないのである。この雑毒の善をもつてお浄土に行こうとしてもそれは出来ないことである。」

(三)「しかるに十方世界の微塵の数程の衆生は、煩惱の海にただよい、生死の苦海に沈み溺れて、真実の廻向心がない。清らかな廻向心はないのである。」

こうした親鸞の血の叫びは、即ち久遠劫来の暗黒を自分のうちに見出して、自分という者の權威も、価値も粉微塵に打ち砕かれた慟哭の声である。なげ出された愚禿の姿である。この深刻なる目覚めこそは、我一人のうちに、一切衆生の罪惡に泣き、煩惱に苦み、暗から暗に沈んでゆく痛ましい姿を自分のうちに見たのである。我々はここに我のこの久遠劫来の我に目覚めて泣かねばならぬと共に、一切衆生を見て泣かざるを得ないのである。一人の罪惡に泣く委こそは一切衆生の罪惡を自己のうちに感ずる姿である。ああ我は一切人類と共に救われぬ久遠の凡夫であり、浮ばれない永劫の衆生であることを、生死の大海、一切の群生海に見出したのである。

生命の全解放

かくして我は一切衆生と共に永劫に救われぬ凡夫であり、一切の教育も教化も役に立たないで奈落の底に沈むより外はないのであろうか。

然るに我々はここに、ついにはしなくも、偉大なる価値の転換に遭遇したのである。見よ、我々はこの全てが打ち破られたどん底に、そこに如来の絶対の大慈大悲の招喚の聲に接するではないか。

まことに久遠の仏心、廻向の仏心において、どこに真実があろうぞ。そもそも我々の罪悪煩惱の姿も、それが廻向されたる絶対の光明なくして、どうして見る事が出来ようぞ。

無限の生死海こそ、彼の長時永劫の仏心が、その無限の活動を表わしたもう舞台ではなかつたか。見よ、如来は悪人正機とよびたまひ、その長時永劫の大慈悲心をば我等無辺の生死海にのみその姿を表わしたもうのであつた。

まことに聖親鸞は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごと、まことあること無きにただ念仏のみぞまことにておはします。」との全否定のまま、全肯定される念仏の世界に出でたではないか。

我等は長い間、善人たれと教えられ、華やかなる理想の世界を見せつけられ、善人たり得ると自惚れ、善人たることを好むの結果、外に賢善精進の姿をあらわしつつ内に虚仮を抱いて永遠の暗に自己を偽わろうとしたのである。

然るに我は今や、生命の全解放の世界に出たのである。悪を悪としてなげ出し、虚仮不実の我を如来の前になげ出した所、我を粉微塵に打ちくだかれたその端的の世界に、如来の久遠の生命は恵まれていたのであつた。

至心

至心、即ちまごころを我が人格のうちにたづねて、ついに得ることが出来ず、「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時にいたるまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心無し。」との痛ましき我に当面した親鸞は「ここを以て如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまいしとき、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来の清浄の真心を以て円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て諸有の一切煩惱、悪業、邪智の群生海に回施したまへり。すなわちこれ利他の真心をあらわす。かるがゆへに疑蓋まじわることなし。この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。」

概念の世界、半自力半他力の世界においては、如来は如来であり、煩惱の我は我であつた。けれども真実なる如来の勅命に直面した我等の体験を以てすれば、永劫の衆生たる我と、一念一刹那も清浄ならざることなく真心ならざることなき如来とは、一体であつたのだ。まことに、我と如来とはこれを切りはなせば、そこには血がながれるのであつた。切れば血の出る関係においてのみ、如来はありたもうのであつた。久遠劫来、如来は、我が生死の苦海においてのみ、不可思議兆載永劫の修行をましましたのであつた。我が煩惱成就の生死の苦海、その無辺の狂乱怒涛の大海を、真一文字に乗りきる大船こそは、如来の弘誓の願船であつた。見よ、幾万トンの大船が山なす大波を難なく乗りきるが如く、如来は生死煩惱無明の大海を乗りきりたもうてあるではないか。海なきところ船はない。無明煩惱のなきところ、そこに如来はないのであつた。

信楽

我等は、定散自力の概念の世界に、永遠の信樂を求めて失敗し、法爾自然として、真実の信樂なき久遠の凡夫たることに目覚めて、千載悲泣の我を如何ともすることの出来ぬのに絶望した。しかしながら、ここに全く別なる世界は与えられたのであった。信樂とは断じて衆生の心ではなかつたのであった。信樂とは実に如来によつて信じられていたことであつた。海の如き如来のみ心は一切群生海を見そなわして、一切の罪惡をお身自ら一身に内感して、無限の大慈悲をもつて長時永劫に一切衆生を捨てたまはざる、海の如き、円融無碍満足の信心のみ心であつた。

しかもその信じたもうみ心は、我が「一切凡小、一切時中に貪愛之心常に能く善心をかけがし、瞋憎の心つねによく法財をやく。急作急修して頭燃をはらうが如くすれども、すべて雑毒・雑修之善となづけ、亦虚仮・論偽之行となづく。真実の業となづけざるなり。この虚仮雑毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲する、これ必ず不可なり。」

この心をはなれては、如来の信じたもうみ心はなかつたのだ。「何を以ての故に、まさしく如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋雜わることなきに由てなり。この心は即ち如来の大悲心なるが故に、かならず報土の正定の因となる。如来、苦悩の群生海を悲憫して、無碍広大の淨信を以て諸有海に廻施したまえり。是を利他真実の信心となづく。」

まことに、如来は、その金剛の淨信を無辺の凡夫衆生のために成就して、直接、この一切の粉碎されたる煩惱成就の無明海にその永劫のみ姿を表わして、我等が信念となりたもうのであつた。さればこそ、この他力廻向の信心こそは、仏性であり、真実であり、如来であり、唯一絶対の無碍の大道であり、利他真実の永遠の白道であつた。まことに信樂とは、如来が生死の苦海に生ききつて、刻々が死であるところの我等の人格を統一しつつ進みたまう久遠の大慈悲心であり、無限の智慧にてましましたのであつた。さればまことに、信樂とは、お身自らを、我が煩惱狂乱の無明の大海に表わしたもうたみ姿であつた。

欲生勅命

過去人類は幾度か神に仏にその至誠のこころを廻向して、その至誠の上に神仏の慈悲を迎えんとし、その永遠の救済を求めんとした。否かくしてそこに救のみ手を得たと信じ、その加護を受け得ると思つていた。然るに、聖親鸞は深刻なる反省のもとに、この半自力半他力の功利的信仰を批判した。そうしてそこに表われたものは、「一切の衆生には断じて真実の廻向心はない。清淨の廻向心はないのだ。」という哀れむべき絶望の自己であつた。しかし、そうした絶対絶命の境地にこそ、そこにいわゆる、欲生の真意義は見出せたのであつた。まことに真実の世界に生れんと欲う心こそは、それは断じて「これ大小、凡聖、定散、自力の廻向にあらず」して、欲生はすなわち廻向心であつたのだ。まことに、欲生とは如来が一切衆生を招喚したもう勅命であつたのだ。ああ、この欲生(かの国に生れんとおもう心)こそ如来の勅命であつたのだ。まことに欲生とは勅命であつた。親を呼ぶ声は、親をよばれている声であつ

た。如来のおよび声は、罪悪生死のどん底に、久遠の我を抱いて泣く我のうちにとどいていたのだ。そこに聞えていたのであった。

念仏

一人が救われたとは十方衆生の救われることである。我が救われないでどうして十方衆生が救われよう。

生命の全解放、「善もほしからず、念仏にまざる善なきが故に。悪をもおそるべからず、念仏をさまたぐるほどの悪なき故に。」善がほしいとて、悪をつつむさもしい心もいらぬのだ。悪がおそろしいとて、善人顔せなくてもよかつたのだ。善をたのみならず、悪に囚れず、一切をなげ出したところに何の重荷があるものか。

「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身に 清浄の心もさらになし」

老年に及んでもなほかくの如く、赤裸々に自己を見て泣きたもう聖親鸞のみ心、その背景には、直ちに、真実、清浄なる仏心が鮮かに輝きたもうてあるではないか。定散自力の相对救済の世界や、囚れた聖者の世界では、美しい心のおこつた時、役にも立たう間にもあうだろうけれども、

「悪性さらやめがたく、こころは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたる。」

こんな悲痛な我を見出しては、不安なる虚飾に生きるか、ゴマカシに姿をやつすかであろう。全てをなげ出して、やめがたき悪性を、蛇蝎のような我を、大胆になげ出して、そこに撰取の光悦に涙ぐむ者には、微塵の不安も、飾りも、虚偽も、そうして少しの重荷もないのである。全否定されたそのままが如来によって全肯定せられて、全否定の千載悲泣の涙のままが、永劫消えぬ法悦となるではないか。

如来とは涅槃真如の世界より久遠の仏心が生死大海に來りたもうことである。如来は真実である。慈悲であり智慧にてまします。「至心に廻向したまへり」とは如来の全体が我に來りたもうことである。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念僻まをさんとおもひたつこころのおおるとき撰取不捨の利益にあづけしめたもうなり」とは如来のみ心が我に來つて我を救いたもうた姿である。「念仏中さんとおもいたつ心。」この心こそ永劫の如来の大悲が、その与えんと誓いたまいしもの全部を与えたまい、求めんとしたものの全部を与えられた端的の救いである。ああこの念仏申さんとおもいたつ心、そこに、我等の全生命は解放せられ、我等出離の綾なき凡夫は、それがそのまま全肯定の世界に出されたのであった。

まことに大慈大悲の如来がその永遠の姿を生死の苦海に投げたまいし姿こそ、五劫兆載不可思議永劫の法蔵菩薩であった。法蔵の大願業力は、罪悪生死の凡夫心中に全的に廻向せられて、「念仏」となつたのであった。念仏は如来の今日今時、現実の我を呼び、我を救い、我を撰取したまいし大獅子吼であり、勅命であり、親心の名告りである。

我等は名号をおいて何れのところに久遠の仏心にふれ、救いをきくことが出来ようか。まことに、念仏は、唯一絶対の如来のみ声であり、如来の全部であり、私をして

如来を知らしめらるる唯一の方便であつたのだ。「この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。如来の至心も名号をはなれてはない。如来の信樂も名号をはなれてはない。如来の勅命も名号をはなれてはない。救いも報謝も感謝も懺悔も、一切が名号をはなれてはない。

否定の奥底に生れ出づる名号は、かくして地上唯一の如来の顕現であり、人間に最後に与えられる無碍の大道である。

「無漸無悦のこの身にて まことの心はなけれども

弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたもう。」(愚禿悲歎述懐和讃)

この和讃こそ、一応ははじらいながら真実の慚愧なきことを慚愧しつつ、見出すべきまことの心なきままに、彼岸より廻向されたる功德の名号に蘇つて、若々しく生ききりたもうた祖聖の生活が鮮かにかがわれている。

「私は今生きている。」

生きているが故に、喜びもすれば悲しみもする。それをそのままに、名号によつて生かされてある。

静かに、幸、不幸をほんとうに味わいつつ、しかもそれに即して名号に生かされ、幸、不幸を超えて、ほんとうに感謝の生活が与えられる。

如来と共なる歩みは刻々の今であつて、何時も全ての打ちくだかれた否定の底にのみ、真仏は名号となつて顕現したもうのである。